

マラヨポリネシア語族のゴング文化

——ベトナム中部高原，マレーシア・サラワク州の事例から——

平成 17 年入学

派遣先国：ベトナム，マレーシア

柳沢 英輔

キーワード：ゴング，青銅打楽器，ベトナム中部高原，文化継承，マラヨポリネシア語族

対象とする問題の概要

先行研究 [Tô Ngọc Thành 2006 など] や申請者の博士予備論文では，ベトナム中部高原におけるゴング演奏とゴング調律者の関係性，様々な儀礼・祭礼におけるゴング演奏の実態を明らかにした。一方，調査を行う過程でゴング文化にはゴングの製造，流通，調律，演奏という大きなサイクルがあり，ゴング文化について考えるにはゴングの製造と流通に関して調査を行う必要があることに気付いた。また前回の調査でゴング文化の衰退には，ゴングの流出やゴング演奏者の高齢化よりむしろ，ゴング調律者の激減が関係していることが推測されたため，ゴング調律者により焦点を当てた調査をする必要があると考えた。またベトナム中部高原のジャライ族と同じマラヨポリネシア語族が居住している島嶼部（マレーシア・サラワク州）のゴング文化について調査を行い，大陸部と島嶼部の比較からゴング文化の地域性について考えたい。



写真 1：ジャライ族の Chiêng Aráp ゴングセット（ナイファイ氏の家で撮影）

研究目的

以上の問題意識より，ベトナムにおける調査では，現在活動している数少ないゴング調律者であるゾーチャム・ベツト氏（73 歳，ジャライ省チュパ県在住）とナイファイ氏（52 歳，ジャライ省クロンパ県在住）に話を伺い，特にその技術伝承における問題の所在を明らかにすることを目的とする。またゴングの製造工場があるベトナム沿岸部において，ゴング製造の実態と，ゴング製造とゴング調律者との関係について聞き取り調査を行う。

マレーシアにおける調査では，サラワク州に住むカヤン族，ビサヤ族のゴング文化について聞き取り調査を行うことで，東南アジア大陸部と島嶼部においてマラヨポリネシア語族の



写真 2：ゴングの製造工場（クアンナム省フッキウ村で撮影）

ゴング文化にどのような違いが生じているのかを明らかにし、またその違いが生じている背景について考察するための材料を得る。また聞き取り調査・儀礼・調律作業などは全てビデオで撮影し、研究の資料・民族誌映画制作の素材とする。

フィールドワークから得られた知見について

ベトナムではジャライ族の著名なゴング調律者であるゾーチヤム・ベット氏（73歳、ジャライ省チュパ県在住）とナイファイ氏（52歳、ジャライ省クロンパ県在住）を訪ね、ゴングの調律や今までの調査から出た疑問点について聞き取り調査を行った。またコントゥム市内で古参のゴングトレーダーであるロン氏（91歳）にゴング売買などに関する聞き取り調査を行った。またクアンナム省フッキウ村のゴング製造工場にて、ゴング製造・販売に関する聞き取り調査を行った。その結果、ゴング製造の実態とゴング製造と調律者の関係についてその概観を把握することができた。

マレーシアではサラワク州ブラガ近郊のカヤン族の村において、ゴングの使用機会などに関する聞き取り調査を行った。その結果、ゴングは個人の私有財産であり、葬送儀礼や治療儀礼などに使われるほか、婚資やアダット（慣習法）を破った際などに必要になることが分かった。またサラワク州リンバンのビサヤ族の村では聞き取り調査のほか葬式におけるゴング演奏を記録した。ビサヤ族ではインドネシアのガムランアンサンブルのような精錬されたゴングアンサンブルが存在し、文化セレモニーや政府の歓迎式典などにおいて演奏していることが分かった。

ベトナムの中部高原と同様、サラワクの各民族は各々異なるゴング文化を継承しており、ゴングの演奏方法や演奏機会などは民族ごとに異なる。一方儀礼における演奏形態はベトナム中部高原のように20人近くの村人が突起ゴング（ベースとリズムを担当）と平ゴング（旋律を担当）を1人1枚ずつ手に持ち合奏するといった高度で複雑な形態とは異なり、比較的少人数での室内合奏（あるいは単に音を鳴らすだけ）の場合が多いようであった。またゴングは治療儀礼で祈祷師が祈祷を行う台座として使用するように、演奏以外の用途にも用いられることがある。

今後の展開・反省点

今回の調査で、ベトナム中部高原のゴング文化が東南アジア島嶼部（バリ島、ボルネオ島等）のゴング文化と比較して、「ゆるい」文化であることに気付いた。例えば、ベトナムではゴング演奏者は普段農作業をしている普通の村人であり、



写真3: ビサヤ族の葬式で演奏される吊ゴング (Tawak) と両面太鼓 (Dumbak)



写真4: ビサヤ族の住居 (サラワク州リンバンにて撮影)

いわゆる「演奏家」ではない。また演奏中もタバコを吸ったり、酒を飲んだり、他の村人としゃべったり、気楽な感じであることが多い。また演奏に使うゴングもしばしばひびが入っていたり割れていたりする。一方で、「改良ゴングアンサンブル」など西洋の「音楽」、「12音階」の文脈に則ったゴングアンサンブルが広まりつつあり、今後こうした「ゆるさ」が「洗練化」へと変わっていくのか、またそれは何を意味するのか考えていきたい。当初予定していた各村のゴング音階と儀礼におけるゴング音階の類似性の調査は、時間的制約などもあり断念せざるを得なかった。当初の調査計画の甘さが原因であり次回への反省点としたい。

引用文献

Tô Ngọc Thành. 2006. *Không gian văn hóa công cộng Tây nguyên*. The Gioi Publishers. Hanoi.